

国際協力分野におけるコロナ禍の  
エビデンス抽出の工夫  
--Withコロナにおける国際協力プロ  
ジェクトマネジメントの一考察

~JICA評価部の事例を基に~

国際協力機構（JICA） 評価部

河野 摂・田村 愛弥

2021年7月3日

# 動機と概要

- JICA評価部はJICA事業評価案件の監理と評価を主に行う部署
- コロナ禍（2020年3月から2021年6月現在）においてもエビデンス抽出を継続的に行ってきた（2021年4月：214件の事後評価報告書公表/年報他）
- コロナ禍でもエビデンスの継続的な抽出の工夫は以下が挙げられる。

【1】 既存のICTツールの活用      【2】 部員レベルの内部マネジメントの工夫

【1】 どのようなツールを利用したのか？有効性はあったのか？

【2】 いつ、どのような工夫があったのか？

## 本発表の構成

前半	【1】 国際協力分野におけるコロナ禍のデータ収集の工夫	量的調査手法
後半	【2】 評価部の部員レベルでの内部マネジメントの工夫	質的調査手法

# 国際協力分野における コロナ禍のデータ収集の工夫

3<sup>rd</sup> July, 2021

国際協力機構 評価部 田村

Tamura.Aya@jica.go.jp

# 要旨

【ねらい】現在実施中であるマラウイの小規模園芸農業推進プロジェクトにおいて農家の家計支出状況のモニタリング・評価を伴走支援するため、コロナ以前から簡易な家計調査手法を用いてデータ収集することを計画していた。

【課題】コロナウイルス感染拡大を受け、国内外において移動制限が生じたため、対面による調査員トレーニングやデータ収集が難しくなった。

【工夫】調査員を県レベルで採用し、トレーニングはオンラインで行い、対面による調査では、家庭訪問ではなく風通しのよい集合場所で待ち合わせの上、実施した。結果、882名中693名の農家の家計支出データを収集できた（回答率78.5%）。

# 家計調査のねらい

簡易的な家計調査を試行実施



より効率的な家計データ取得

プロジェクト実施中から伴走支援できないか



「ODA事業の実施により住民の所得はどれだけ向上したのか」

- 対象者の選定は適切か
- 所得に関するデータはあるか
- 評価・モニタリングは十分か

# 対象事業

案件名：

マラウイ国「市場志向型小規模園芸農業推進プロジェクト (MA-SHEP)」

目的：

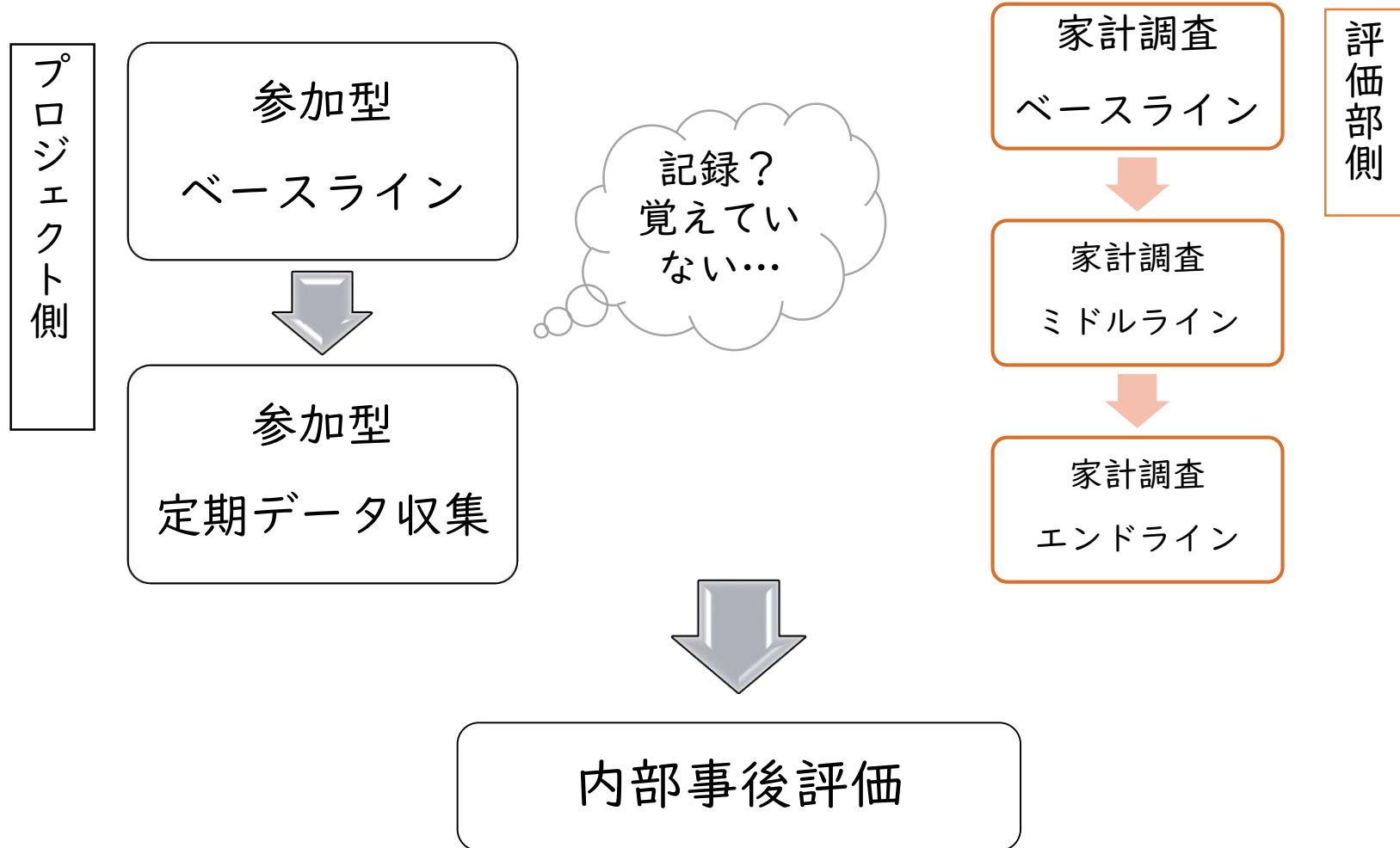
マラウイ国において市場志向型農業アプローチを実践することにより、対象小規模園芸農家の所得向上を図り、もって全国の小規模園芸農家の所得向上に寄与するもの

事業期間（予定）： 2017年4月～2022年3月（計60ヶ月）

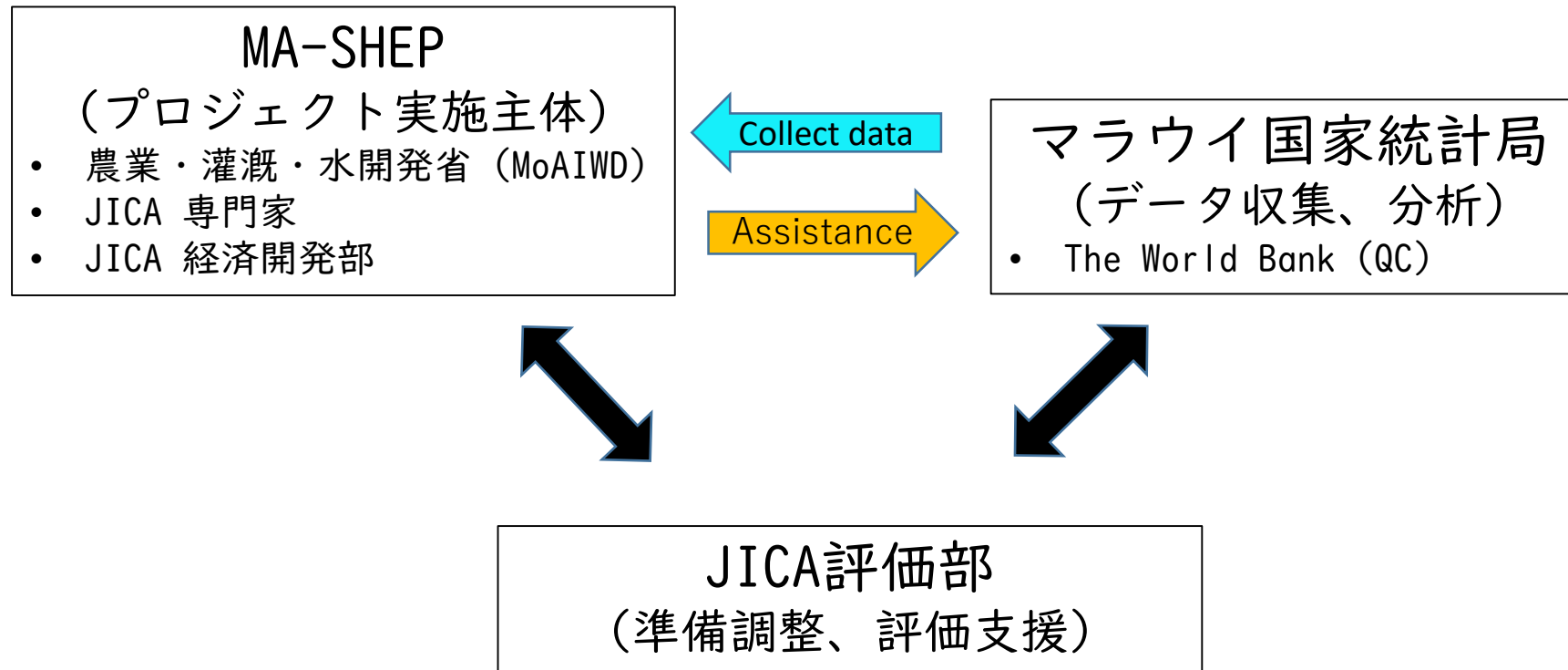
総事業費（予定）： 約4億円（日本側）

出所：[事業事前評価表](#)

# 現場の動き

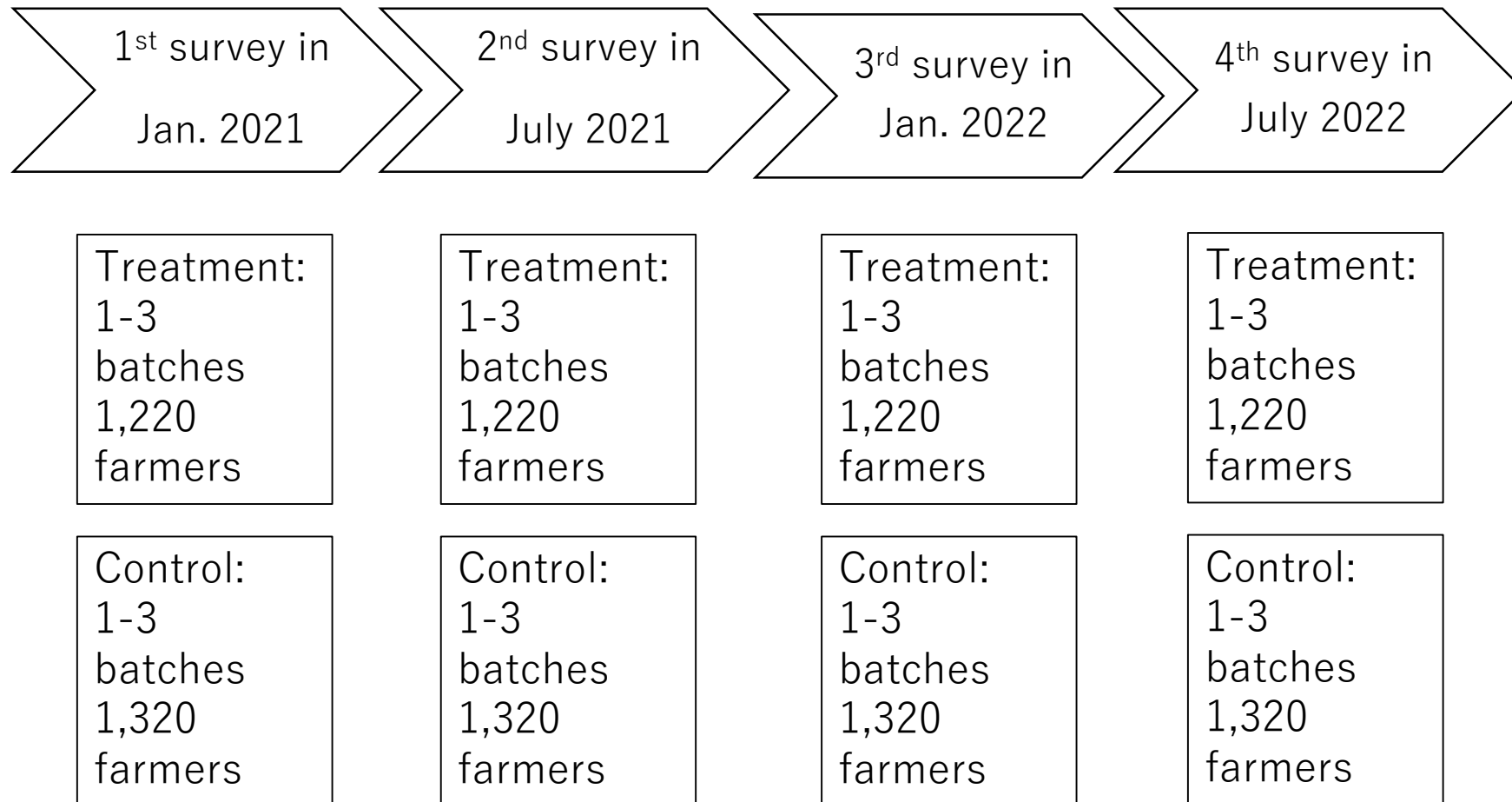


# データ収集体制





# データ収集スケジュール



# 遠隔で実施した事項

1. 質問票の検討、最終化
2. 電話調査オンライントレーニング ← 待機人材活用
3. 電話調査（比較群に関するデータ収集）
4. キックオフオンライン会議
5. 収集データの共有（可視化） ← BIツール活用

# 電話調査の限界

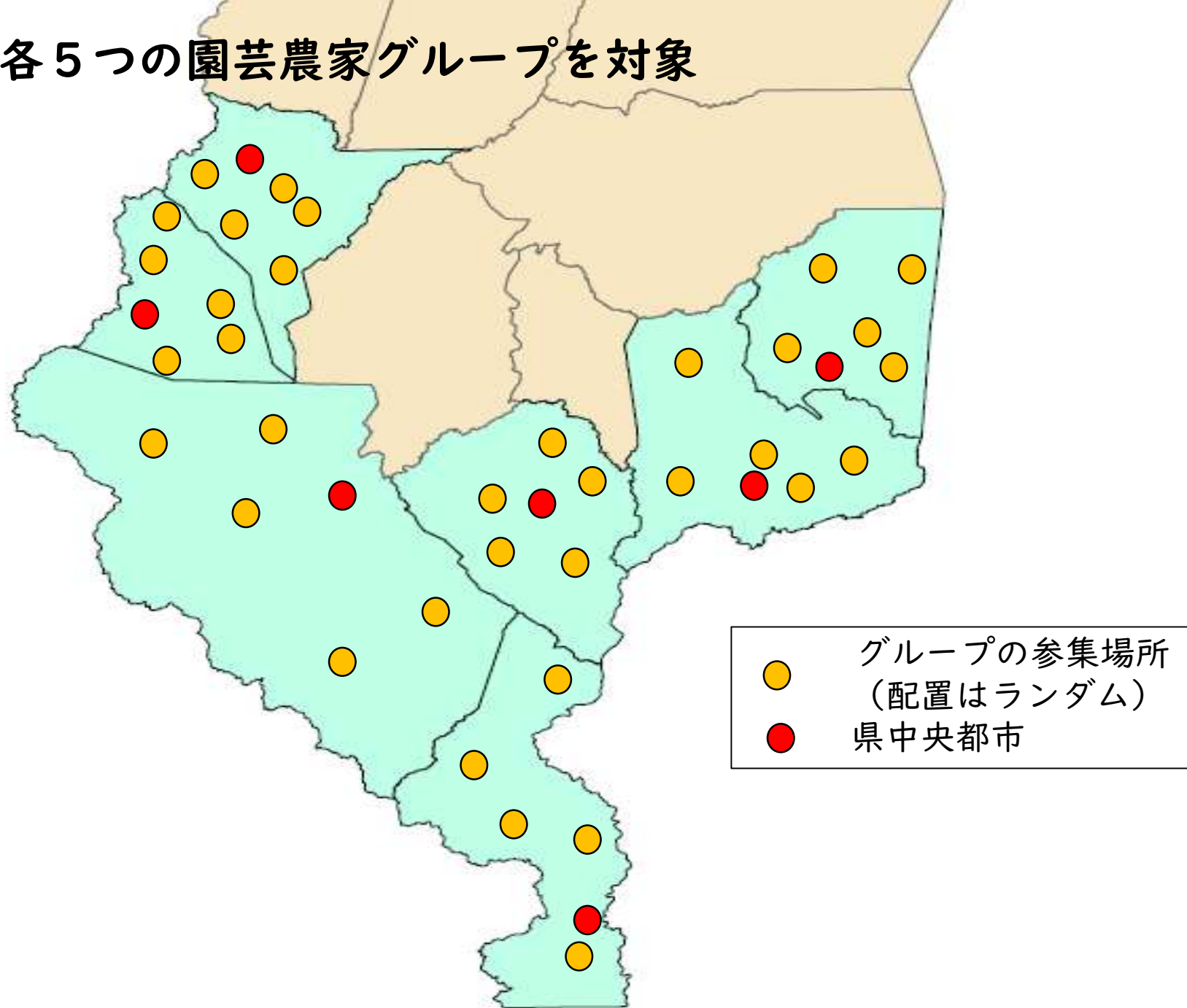
- (電話を所持していない世帯にリーチできない)
- 電話に出る人 ≠ 対象者
- 表情がわからない
- 視覚情報を提示できない
- 気になる充電、電話代、時間等…

# 対面で実施した事項

## 1. パイロット調査

- 対象農家 MA-SHEP対象7県35グループ882名
- 調査員 7県より計18名
- 実施期間 2021年3月24日～28日（5日間）
- 手法 事前アポイント、集合場所にて回答
- 結果 693名のレスポンス 78.5%回答率

# 7県各5つの園芸農家グループを対象

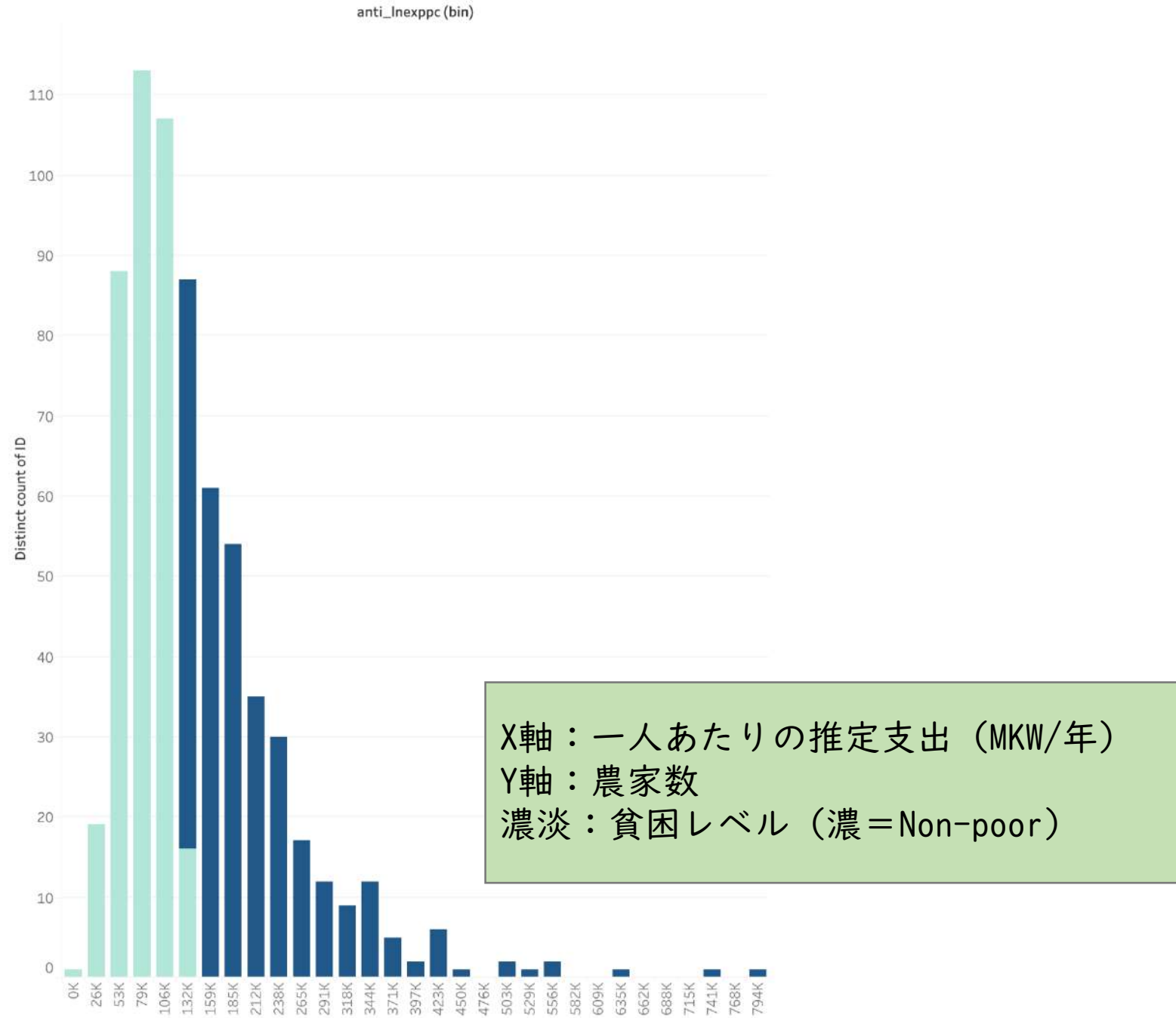


Where are the group meeting venues?

データ収集を実施した集合場所の位置情報  
地図上で興味のあるグループをクリックして  
データをフィルターする。



# Estimated expenditures



# 参考文献

Yoshida, Nobuo; Munoz, Ricardo; Skinner, Alexander; Lee, Catherine Kyung-Eun; Brataj, Mario; Durbin, Spencer William; Sharma, D..2015.

*Survey of Well-Being via Instant and Frequent Tracking (SWIFT) Data Collection Guidelines (English)*. Washington, D.C. : World Bank Group.

<http://documents.worldbank.org/curated/en/591711545170814297/Survey-of-Well-Being-via-Instant-and-Frequent-Tracking-SWIFT-Data-Collection-Guidelines>

プロジェクト概要 | 市場志向型小規模園芸農業推進プロジェクト | 技術協力プロジェクト | 事業・プロジェクト - JICA. (2021). Japan International Cooperation Agency. <https://www.jica.go.jp/project/malawi/006/outline/index.html>



# 評価部の部員レベルでの 内部マネジメントの工夫

国際協力機構 評価部 河野  
Kono.Setsu@jica.go.jp

# 評価部の部員レベルでの内部マネジメントの工夫

## 問題の所在

部内の会議で都度課題が共有され、解決を行う仕組みはあったものの、コロナ禍、評価部内でどのような課題があり、どのように解決をしてきたかについて改めて認識する機会がなかった。

## 今回行ったこと

時系列で部員の課題認識とその解決方法をプロットし可視化

## ねらい（短期）

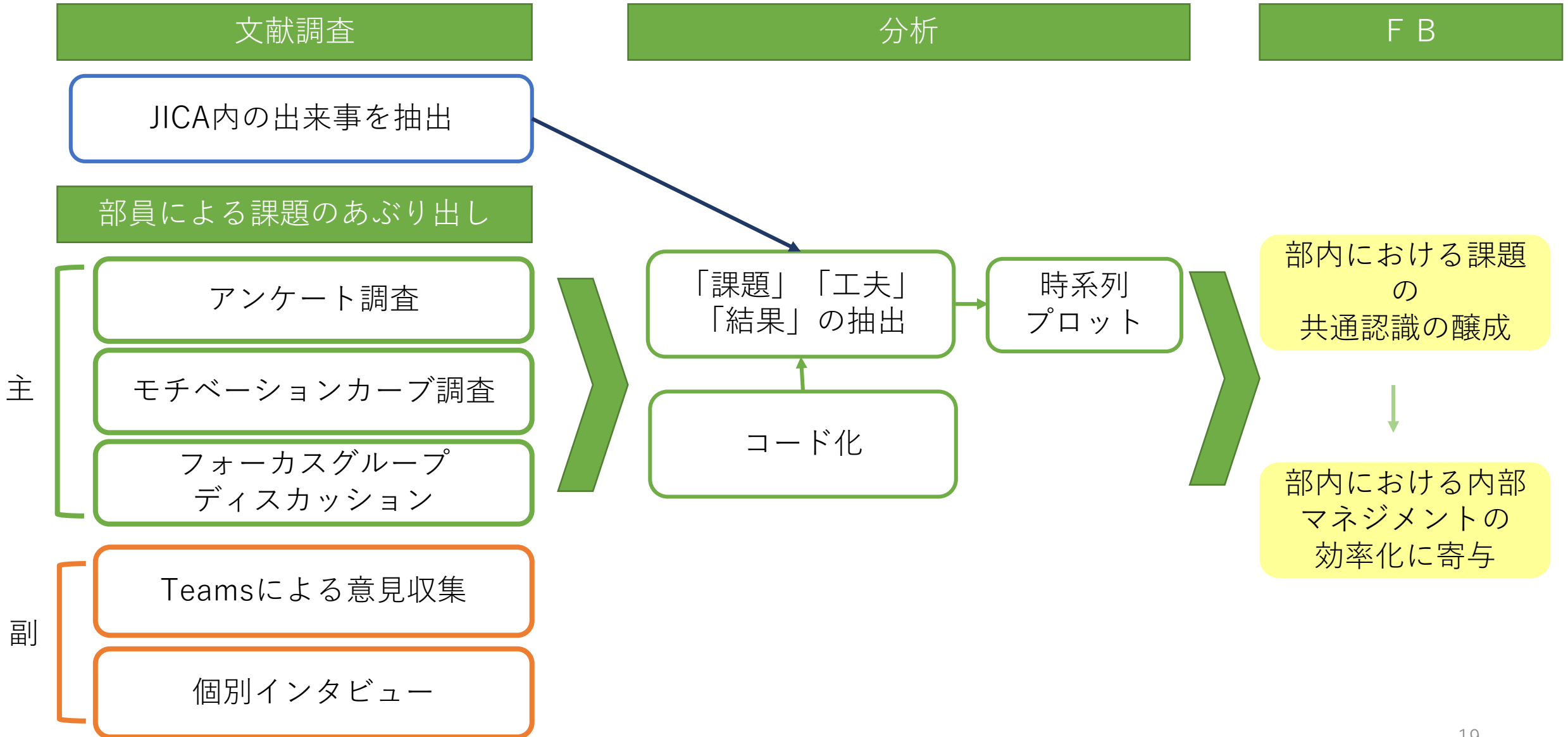
部内FBで共通課題認識の再醸成。

部内FBで参加型評価を行うことによる組織内ラーニングの向上

## ねらい（長期）

組織内のモチベーションアップと今後の内部マネジメントの効率化を同時に図り評価の質を担保する

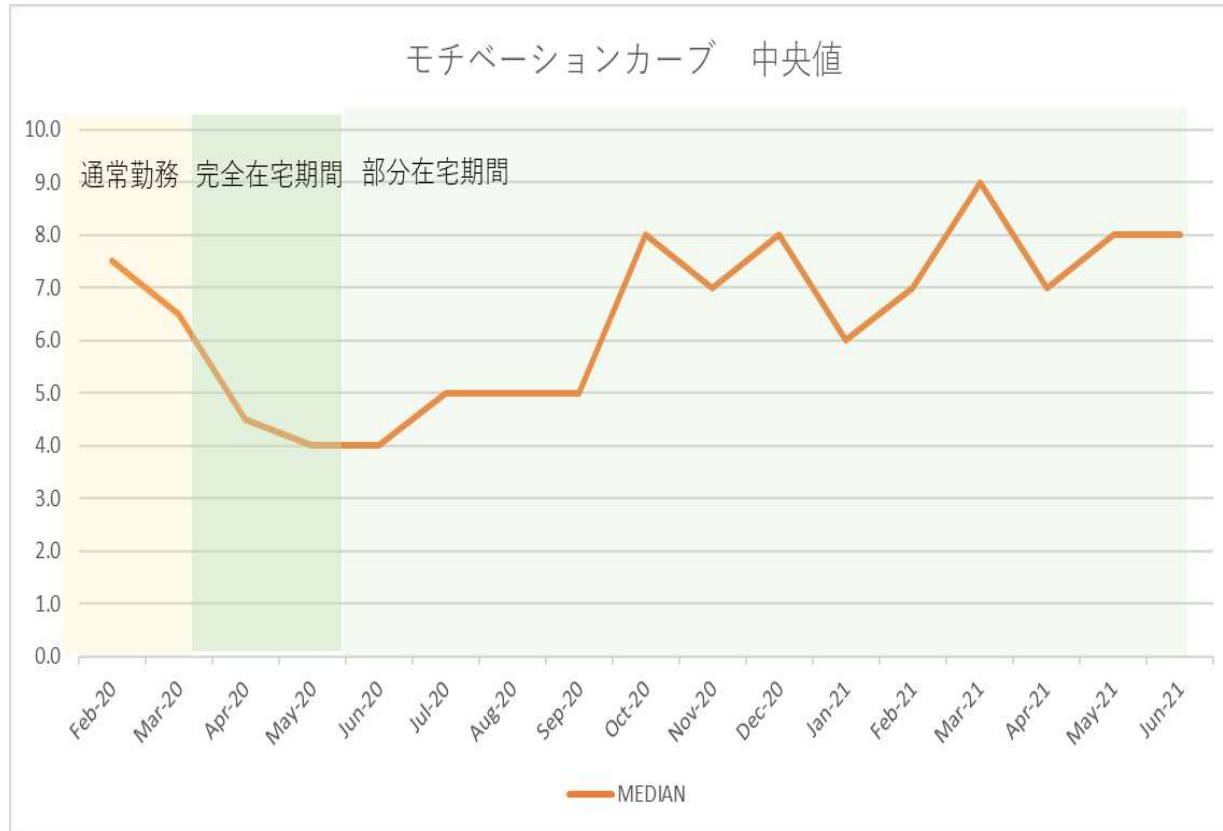
# 各調査と分析の流れ



# 調査概要

<b>目的</b>	コロナ禍における部員レベルでの内部マネジメントの工夫についての組織内ラーニング向上を目的とした参加型評価			
<b>全体調査期間</b>	2021年5月21日-2021年6月22日			
<b>対象者</b>	JICA評価部員で2021年6月現在事業評価を担当する14名			
<b>設問</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コロナ禍における部員レベルでの内部マネジメントの満足度</li> <li>・ コロナ禍における部員レベルでの内部マネジメントの課題の認識の有無</li> <li>・ コロナ禍における部員レベルでの内部マネジメントの課題を解決するための工夫とその結果、またそれがいつ行われたのかについての確認</li> </ul>			
<b>調査方法</b>	アンケート調査とモチベーションカーブ調査（後述）	フォーカスグループディスカッション	Teamsによる意見収集	個別インタビュー
<b>各調査の位置づけ</b>	主	主	副	副
<b>各調査期間</b> ( ) は回答・参加人数	プレ：5月28日（4名） 本番：6月9日～22日（14名）	第1回：6月9日（1名） 第2回：6月11日（7名）	6月9日～22日（随時）	6月9日～22日（10件）
<b>分析とF B</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 課題とその解決策・結果を時系列に並べ、傾向を確認（6月22日）</li> <li>● 部員からのF Bで部内での課題解決方法を各自が認識し今後の業務効率化を図る</li> </ul>			

# 満足度調査



## ①「モチベーションカーブ」(n=10)

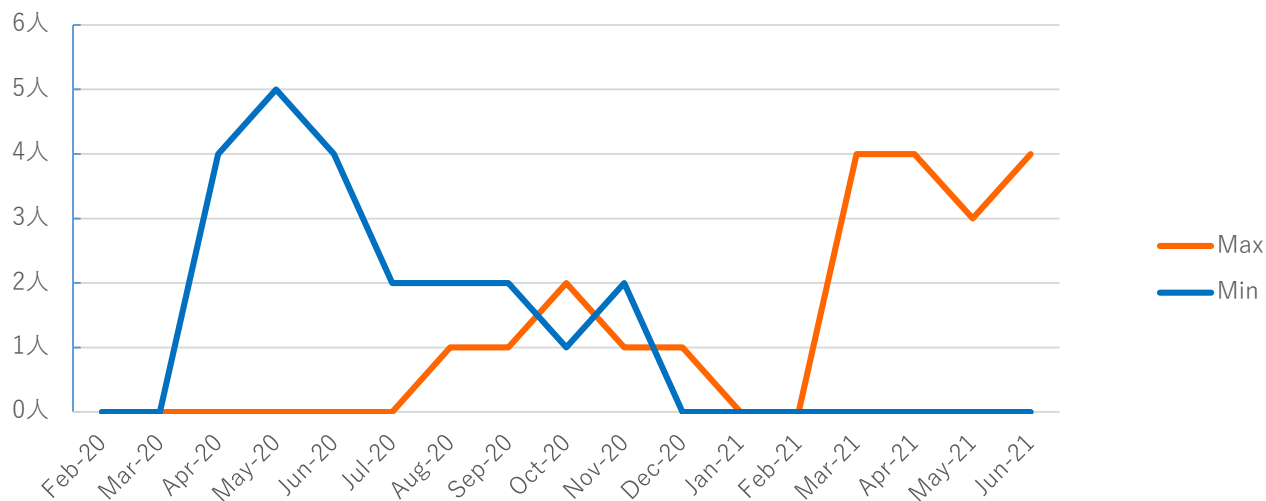
- 「人生振り返り曲線」(これまでの人生の浮き沈みを主観的な曲線で描いたもの)を参考に2020年2月から2021年6月までの仕事に対するモチベーションカーブを描く。
- 紙版アンケート用紙を使用。
- 月ごとに10段階評価→定量的に把握
- N=10 (部分在宅期のため)
- 【傾向分析】個人ではバラつきがあるものの、全体では完全在宅期に最低値をマークし、その後は上昇トレンド

## ②アンケート調査 (n=14)

- 2021年6月現在：8割満足

# モチベーションカーブの分析（詳細）

モチベーションカーブ 最低値と最高値の累計  
(複数回答可)



## 各値の要因 ※カッコ内は回答数

最低値 (32)	最高値 (21)
既存業務 (10)	無回答 (11)
在宅 (6)	既存業務 (6)
システム (5)	対外発信 (2)
仕事量 (4)	対外交流 (1)
プライベート (5)	新規業務 (1)
新規業務 (2)	-

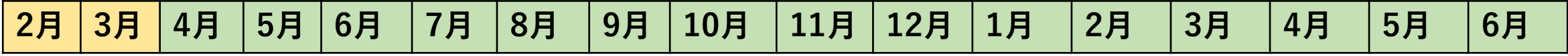
- 最低値は2020年4月から12月まで。最高値は2020年8月より徐々に増えている。
- 最低値の要因として挙げられた「既存業務」「システム」「仕事量」「プライベート」は2020年4月、5月に集中→完全在宅期（2020年4月5月）にかかる課題か？
- 最高値の要因として挙げられた「既存業務」は具体的には「業務の区切り」を挙げる人が3人いた。また「対外発信」や「対外交流」は2020年8月以降リモートでの参加であった。

# 時系列プロット作業：「課題意識」と「工夫」

2020年

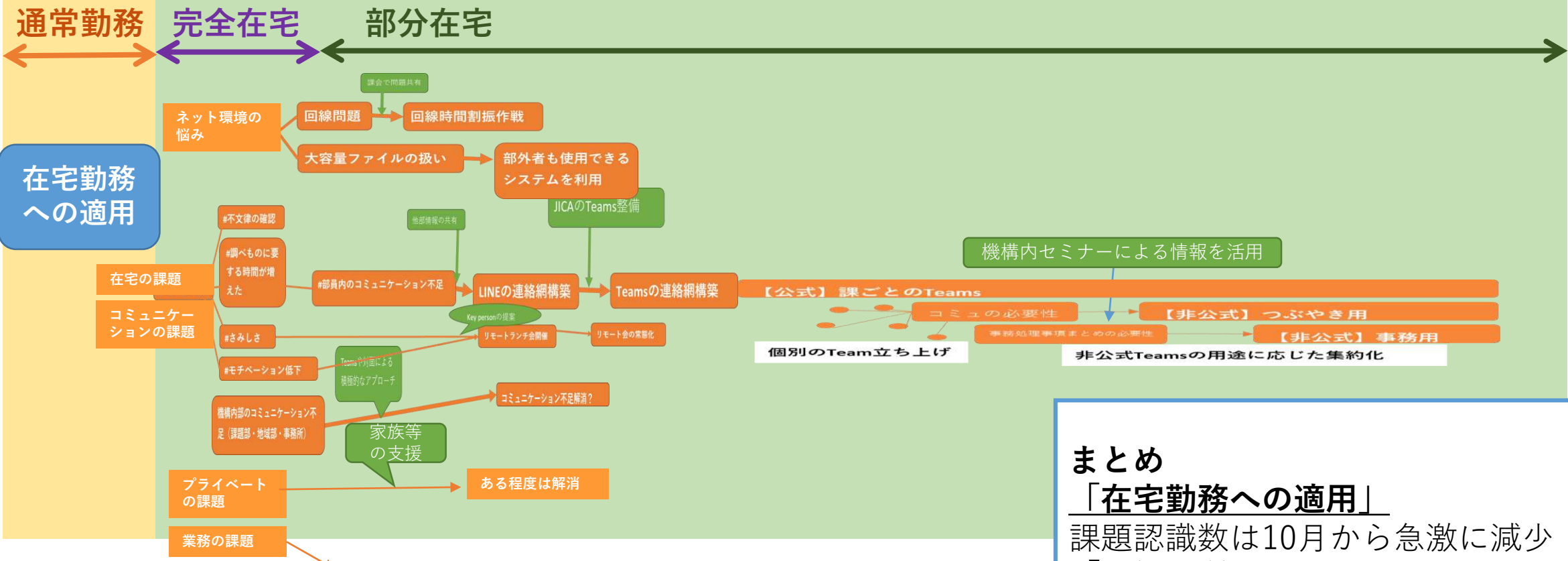
ウィズコロナ

2021年



勤務体制

部内の課題



評価の質

現地調査の代替・補完  
現地での確認作業の遅れ → ITの利用/既存手法活用検討

**まとめ**  
「在宅勤務への適用」  
 課題認識数は10月から急激に減少  
「評価の質」  
 在宅・部分在宅関係なく継続的に存在。

# 組織の電子化と 部内の課題意識の変遷

2020年4月

完全在宅

組織（JICA）の課題：職員全員が在宅勤務の体制ははじめて

組織（JICA）のアクション：電子化の推進

段階的な電子化

評価部の  
ミッション

在宅勤務への適用

①部員による内部  
マネジメントの工夫の期間

コミュニケーションの課題

業務の課題

ネット環境の課題

プライベートの課題

2020  
年  
10月

電子化を  
実感

②組織のITシステムを工夫  
し活用する期間

ネット上の情報過多に係る課題

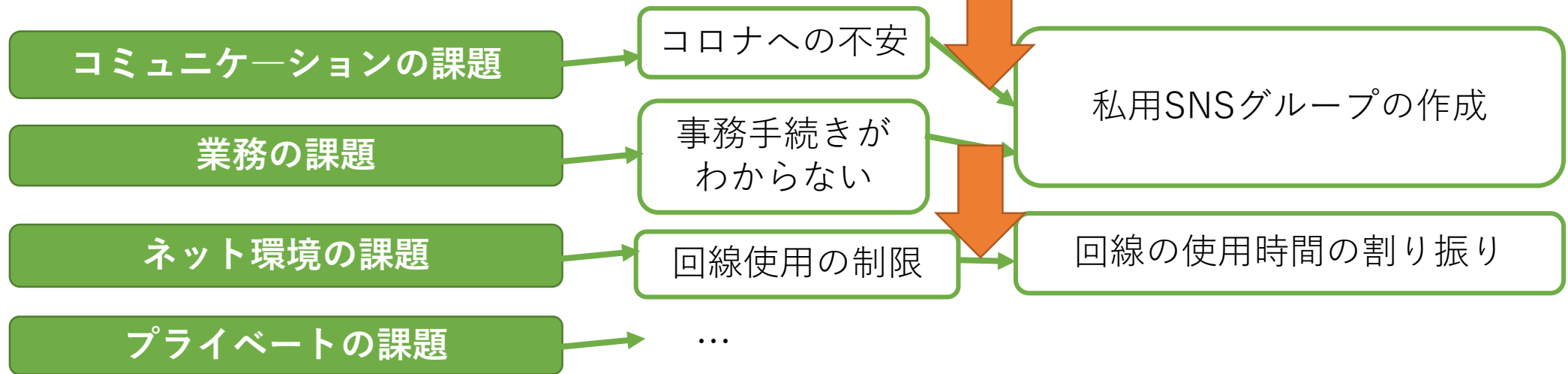
在宅で電子対応可の  
コンテンツ（2020年10月現在）

- ①組織内文書の閲覧・使用
- ②申請書類等
- ③決裁体制（一部）
- ④サイン・印の活用
- ⑤部員間コミュニケーション  
ツール（Teams）
- ⑥大容量ファイルの格納



# 課題解決のための工夫（抜粋）

## ①部員による内部マネジメントの工夫の期間（2020年4月～9月）



## ②組織のITシステムを工夫し活用する期間（2020年10月～）



## 評価部の部員レベルでの内部マネジメントの工夫

### ①在宅勤務への適用への工夫の内容は6か月（2020年10月）を境に変化

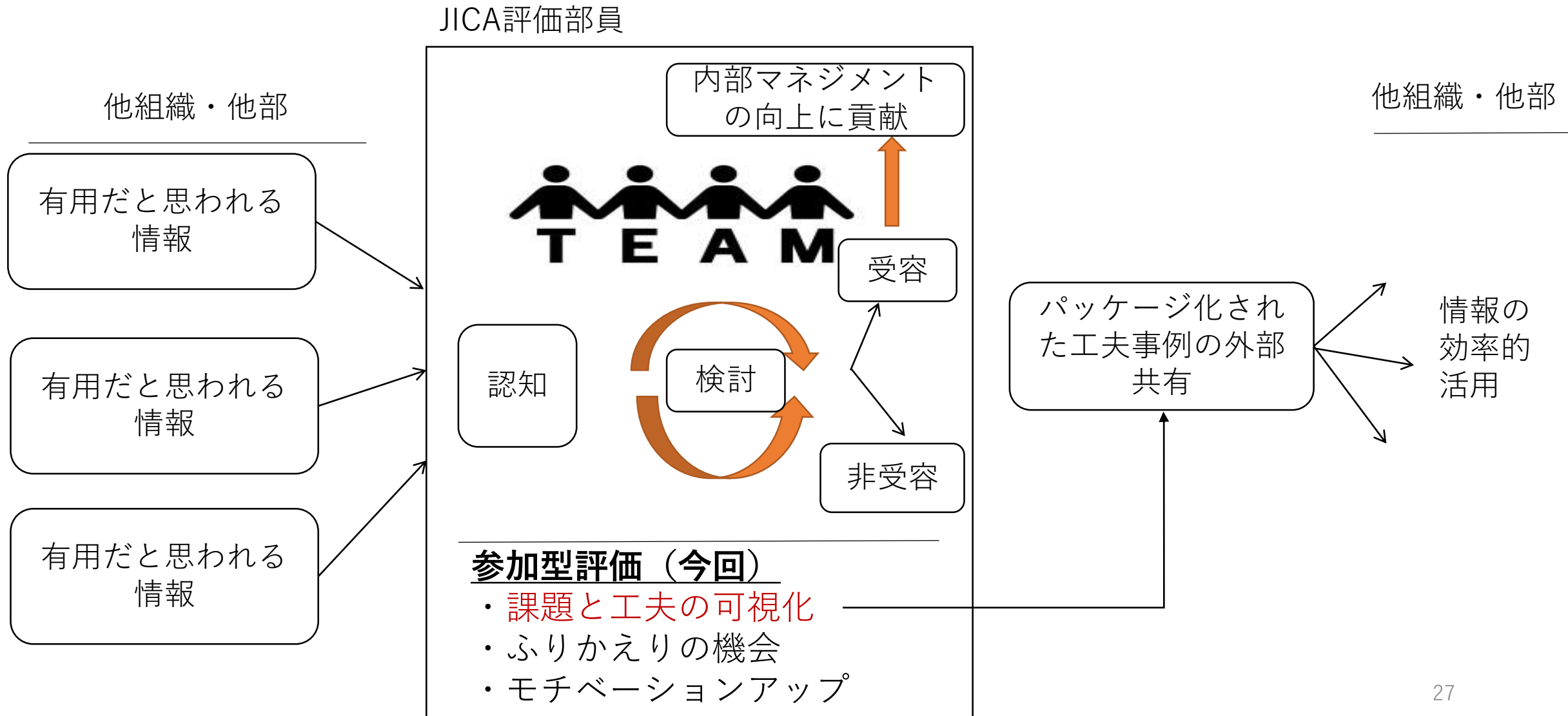
→電子化の移行を実感する前と後での変化。電子化移行前は部員が協力をして課題解決をする必要がある。

### ②工夫は他組織・他部の情報とそれを活用しようとする部員の積極的なアクションによって成される

### ③評価の質における工夫は期間中変化は見られない

ITの利用・既存手法の活用可能性の検討を常に行うことが重要

# 【まとめ】 本調査の活用イメージ



# 総括

- コロナ禍の課題に対応するため…

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① ICTツールの活用</li><li>②部内の部員レベルでの内部マネジメントの工夫</li></ul> |
|--|

が行われた。

- あくまで現時点ではあるものの、これらの対応によりコロナ禍でもある程度評価の質を保つことはできている。

ご清聴ありがとうございました。